DX 推進のための、内製化復活の メリットとデメリットについての研究

アブストラクト

1. 研究の背景

近年、急激なビジネス環境の変化に対応するために、多くの企業が競争力維持・強化のためにDX推進に取り組んでいる。DX推進に必要な要素として開発スピードの向上や先進IT技術の活用が求められるが、その実現手段として内製化が非常に注目されてきている。しかしながら、従来システム開発を外製化するのが一般的な日本企業において、実際に内製化の活用まで踏み込めている企業は少ない。

分科会参加企業においても、システム開発のアジリティ向上や開発人材のスキル向上を目的に、8割の企業がシステムの内製化を検討している。内製化が前提となるアジャイル開発については内製化を進めているケースはあるものの、ウォーターフォール開発を採用した大規模なシステムにおいてはまったく内製化が進められておらず、結果としてDX推進が進まない現状が明らかとなった。

2. 研究目的

分科会内で検討した結果、内製化に必要なIT人材やスキルおよび環境の不足が原因で、DX推進のために内製化をすべきか判断できず活用が進んでいない状況が判明した。また、原因を深耕していった結果、スキル不足により必要な人材や環境が不明確になっているといった前後関係があると分析した。

しかしながら、社会的な人材不足の中では、スキルを持った高度な有識者を集めることが難しい。よって、DX推進を目的としたウォーターフォール開発を採用するシステムの開発を行う際に、高度な有識者がいなくとも、内製化の活用を手段として取りえるか判断可能にする手法の研究を目的とする。

3. 研究内容

スキルや人材が不足する状況でも内製化を活用すべきか判断できるようにするため、以下の2点の情報を開発工程ごとに整理する必要があると考えた。

1点目は内製化のメリットとデメリットについて整理することで、有識者でなくとも対象のシステムの内製化によりDX推進に繋がるメリットがあるか確認し、内製化がDX推進手段として適切か否かを判断できるようになると考えた。

2点目は内製化に必要な人材やスキルセットおよび環境といった内製化実施に必要な要素を整理することで、内製化の実績がない企業や人材においても、内製化に必要な人材やスキルおよび環境を把握し、自社とのギャップを明らかにすることで、内製化の実施可否を判断できるのではないかと考えた。

分科会では、内製化事例や先行研究などの調査と、ブレインストーミングによるアイデア発想により、これら2点の情報について取りまとめた。また、内製化の実施可否を工程ごとに判断できるようにし、システム開発の一部の工程のみを内製化したいケースにも対応できるようにした。取りまとめた2点の情報を基に、質問への回答形式で内製化の実施判断ができる内製化チェックシートを作成した。

4. 評価と考察

本研究では、内製化チェックシートの有用性を評価するために、このチェックシートを22のシステム開発プロジェクトに適用し、内製化の実施状況を判定した。また、アンケート調査によりその結果に対する意見を各システムの担当者から収集した。その結果、内製化チェックシートによる内製化判定結果が一般的な内製化傾向と一致し、アンケート結果でも内容の妥当性に関して肯定的な結果を得ることができた。よって、内製化の経験や知識が少ない企業においても、本チェックシートを利用する事で自社の内製化準備状況を把握し、DX推進のための内製化が有効かどうかを正しく判断できると評価した。